



『列仙傳』の仙人(一)：黄帝・關尹子・涓子

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2010-05-10 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 大形, 徹 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24729/00004515

『列仙傳』の仙人(一)

— 黄帝・關尹子・涓子 —

大形 徹

はじめに

拙稿では最古の仙人の伝記集であり、おそらく後漢あたりに作られた『列仙傳(一)』が仙人としてとりあげたものの中から、いくつかの事例をとりあげて、仙人伝説がどのように形成されていったかについて考察する。『史記』以前の古い文献にも後世、仙人とされる人物の名はみえるものの、それは必ずしも仙人として記述されているわけではなく、そもそも仙人という言葉はその当時まだ生まれていなかったと思われる。『史記』には仙人の固有名詞がいくつかあらわれる。秦始皇本紀、武帝本紀、封禪書、留侯世家などに「羨門高」、「宋毋忌」、「正伯僑」、「充尚」、「最後」、「黄帝」、「安期生」、「赤松子」などが仙人として記されている。ところが、その具体的な事跡

となると、はなはだ貧弱であり、そもそも、そのような言い伝えがあったことすら疑わしい。また本稿でも考察する「黄帝」などは、確かに仙人とはされているが、古代の伝説上の皇帝というイメージの方が強く、たんに仙人の枠には収まりがたいものである。

ところが『列仙傳』になると上・下篇あわせて七十余名の仙人の名が記されており、く傳という書名からもわかるように、そこにはそれぞれの仙人の伝記が記されている。仙人が架空のものだとするならば、『列仙傳』に記されている仙人はすべて何らかの作為にもとづいて作り上げられたものであるが、そのパターンはそれぞれの話によって異なっている。『列仙傳』を校訂したものとしては、王照園『列仙傳校正』、清の胡珽『列仙伝校譌』、董金鑑『列仙伝補校』、孫詒讓『列仙伝校』、平木康平・大形徹『列仙傳(二)』がある。また

訳注としては、沢田瑞穂『列仙傳』(3)、前野直彬『列仙傳』(4)、平木康平・大形徹、鑑賞・中国の古典9『抱朴子・列仙伝』(5)がある。最後にあげたものは筆者が平木康平氏と共同執筆したものであり、その総説で『列仙傳』について概観し、さらにそれぞれの話につけられた鑑賞部分で解説を加えている。ここではそれらの考察をふまえ、とくに仙人がどのように作られていったのかといった観点から検討したい。なお今回は、黄帝・關尹子・涓子について考察する。

黄帝

黄帝については数多くの論考がある。鉄井慶紀『黄帝伝説について』の

中国民族の共通の始祖として語り伝えられている黄帝(『山海經』『世本』)の第一次的意味については、上帝であり、就中、皇天上帝の皇帝の分化と説く楊寛氏の説と、『尚書』『詩経』『論語』『孟子』に見えず、『莊子』や『列子』に始見することにもとづいて、戦国時代の五行思想によって発生したとみる多くの学者の説とに大別される(6)。

が簡明な説明であろう。

楊寛の説は「黄帝与皇帝及上帝(7)」に記されており、五行思想との関連は津田左右吉『道家の思想とその展開(8)』などに代表されるという。『列仙傳』の黄帝の話は、鉄井慶紀氏の論考には引かれていない。しかし、『列仙傳』がもつところの『史記』孝武本紀や『漢書』郊祀志の話は、「黄帝が龍に乗って昇天する記事」と概括され、『列子』黄帝篇や『莊子』大宗師、『史記』封禪書などにも黄帝昇天のことが記されている」と述べられる。

『莊子』大宗師には、黄帝が道を得て天に登る話が引かれている。以下に述べる『史記』や『列仙傳』の黄帝の昇天の話の本となる話であり、かつまた崑崙(崑崙)や西王母など神仙思想と関わる話が記されている箇所でもある。

夫れ道には情有り信有るも、為す無く形無し、傳う可くして受く可からず、可得くして見る可からず、自ら本づき自ら根づき、未だ天地有らざりしとき、古自り以て固より存し、鬼を神にし、帝を神にし、天を生じ地を生じ、太極の先に在りて高しと為さず、六極の下に在りて深しと為さず、天地に先んじて生まれ久しきと為さず、上古より長じて老いたりと為さず。豨韋氏之

れを得て、以て天地を挈げ、伏羲氏之れを得て、以て氣母を襲ぎ、維斗之れを得て、終古忒わず、日月之れを得て、終古息まず、勘壞之れを得て、以て昆侖を襲ぎ、馮夷之れを得て、以て大川に遊び、肩吾之れを得て、以て大山に處り、黃帝之れを得て、以て雲天に登り、顓頊之れを得て、以て玄宮に處り、禺強之れを得て、北極に立ち、西王母之れを得て、少廣に坐し、其の始を知る莫く、其の終を知る莫し、彭祖之れを得て、上は有虞に及び、下は五伯に及び、傳説之れを得て、以て武丁に相となり、天下を奄有せしむ、東維に乗り、箕尾に騎りて列星に比す(9)。

ここにみえる黃帝は道を得た結果、天に登るとされている。けれども、「馮夷之れを得て、以て大川に遊び」といった表現をみれば、本来、川の神である馮夷に関して、彼が川の神であるのは道を得たからだとされていることがわかる。同様に考えれば、本来、黃帝は天の神すなわち上帝であったのだろう。それが道を得たことによつて天に登つたように記されているのである。

『莊子』では黃帝は上帝であろうが、『史記』や『列仙傳』では必ずしもそのままのイメージではない。

天子の黃帝が昇仙する話は『史記』の封禪書の中で、方士の公孫

卿が武帝に説いたものである。この昇仙の部分の原文のみをここにあげてみる。

黃帝采首山銅、鑄鼎於荆山下。鼎既成、有龍垂胡髯、下迎黃帝。黃帝上騎、羣臣後宮從上者七十餘人。龍乃上去。餘小臣不得上。乃悉持龍髯。龍髯拔墮、墮黃帝之弓。百姓仰望、黃帝既上天。乃抱其弓與胡髯號。故後世、因名其處曰鼎湖、其弓曰烏號。(封禪書第六)

『列仙傳』卷上、五、黃帝は以下のように記されている。

黃帝なる者は、號して軒轅と曰う。能く百神を効し、朝せしめて之れを使う。弱にして能く言い、聖にして預知す。物の紀を知り、自ら以て雲師と爲し、龍形有り。自ら亡日を選び、群臣と辭す。卒するに至りて、還して橋山に葬る。山崩るるに、柩空しくして尸なし。唯だ劍と寫とのみ焉に有り。『仙書』に云う、黃帝は首山の銅を探り、鼎を荆山の下に鑄す。鼎成りて龍有り。胡髯を垂れ、下りて帝を迎えて乃ち昇天す。群臣百僚悉く龍の髯を持ち、帝に従わんとして帝の弓に升攀す。龍の髯抜けて弓墜つるに及びて、群臣從うを得ず。帝を望みて悲號す。故に後

世、其の處を以て鼎湖と爲し、其の弓に名づけて烏號と爲す、と。

黄帝者、號曰軒轅。能劾百神、朝而使之。弱而能言、聖而預知。

知物之紀、自以爲雲師、有龍形。自擇亡日、與群臣辭。至於卒、還葬橋山。山崩、柩空無尸。劍点在焉。仙書云、黄帝採首山之銅、崇鼎於袖山之下。鼎成、有龍垂胡鬚、下迎帝乃昇天。群臣百僚、悉持龍鬚、從帝而升攀帝弓。龍鬚拔而弓譚、群臣不得從。望帝而悲號。故後世以其處爲鼎湖、名其弓爲烏號焉。(上記の『列仙傳』の原文に施した○印は『史記』の文章と重複している箇所である。)

『列仙傳』では『仙書』に「云う」とされている部分に文章の重複が多く、内容もほぼ同一である。この部分は『史記』封禪書では、公孫卿が引用した「申公」の言とされている。「申公」は安期生の友人とされているが、「申」は「神」に通じる。公孫卿が自分の言に信用をもたせるために作り出した人物であろう。それを『列仙傳』では「仙書」という言葉で表している。『列仙傳』の当時、「仙書」と呼ばれる神仙思想に関する書籍があったのかもしれない。

『史記』では、その後、武帝が橋山で黄帝の冢を祭ったことを記す。そのとき武帝は、「不死」とされる黄帝がなぜ死んで冢に葬られ

ているのかと疑った。その質問に対して、臣下の一人が機転をきかせて、

黄帝は已に天に僊り上り、羣臣、其の衣冠を葬る(10)。

と述べた。その場は武帝も納得したのである。

この話は『列仙傳』の中では、臣下の作り出した咄嗟の話とはされず、多少の合理化をくわえて最初からそのようであったという形で取り込まれている。「自ら亡日を擇び、群臣と辭す。卒するに至りて、還して橋山に葬る。山崩るるに、柩空しくして尸なし。唯だ劍と寫とのみ焉に有り」とあるように、黄帝はまず自分の死亡する日を予告できる人物としてあらわされている。死亡した後は橋山に葬られたが、その後、偶然にも山が崩れ、柩が空となり、遺体が消えていたことが記される。また柩の中には、劍と点だけが遺されていたという。このくだりは、「衣冠を葬った」とされる『史記』の記述とは合致していない。けれども尸解仙の形式をとることによって、かえって黄帝の昇仙を印象づける話となっている。

なお『列仙傳』の黄帝の伝の冒頭の

黄帝者、號曰軒轅。能劾百神、朝而使之。弱而能言、聖而預知。

知物之紀、自以爲雲師、有龍形。自擇亡日、與群臣辭。至於卒、還葬橋山。山崩、柩空無尸。劍寫在焉。仙書云、：

の部分もわずかではあるが、『史記』五帝本紀の以下の箇所と関連する。ここも重複している字句に○を施した。

黄帝者：名曰、軒轅。生而神靈、弱而能言、幼而徇齊、長而敦敏、成而聰明。：順天地之紀、：官名皆以雲命、爲雲師。：黃帝崩、葬橋山。『史記』卷一、五帝本紀第一)

なお『史記』には、「○而○○」という句形が連続してあらわれるが、『列仙傳』の「朝而使之。弱而能言、聖而預知」の部分はずべて同じではないものの、まさにこの句形が用いられている。『列仙傳』の黄帝の伝の冒頭部分は『史記』五帝本紀にもとづくのである。興味深いのは、「生而神靈」の部分が『列仙傳』にないことである。最初から神靈であれば、その時点ですでに仙人を超えてしまいい、不都合であるという配慮が働いているのかもしれない。『列仙傳』の場合は、仙薬の服用や修行の結果、仙人となった、とされることが多い。ただし、「能効百神、朝而使之」の部分は『列仙傳』で付加されているものであり、そこでは一般の神々よりも上であるとされ

ている。

「聖而預知」、「有龍形」、「自擇亡日、與群臣辭」、「至於卒、山崩、柩空無尸。劍寫在焉。仙書云」などの部分も『史記』になく、亡佚した他書を参考にしたのか、あるいは『列仙傳』の創作であろう。

『列仙傳』の黄帝の伝記は、すでに『史記』に昇仙の伝説があったため、封禪書の該当部分を中心にすえ、五帝本紀の黄帝の伝から補い、さらに仙人らしき話を付加するという構造となっていることがわかる。

なお黄帝は馬王堆出土の房中術の書、『十問(二)』の一から四までに登場する。房中術は長生不老をめざし、神仙思想の一要素となるのだが、『列仙傳』の黄帝の伝の内容とは直接かわらない。また『漢書』藝文志には、黄帝の名を関する書物が甚だ多いが、そのうち、神僊十家のなかの『黄帝雜子步引』十二卷、『黄帝岐伯按摩』十卷、『黄帝雜子芝菌』十八卷、『黄帝雜子十九家方』二十一卷に黄帝の名がみえる。つまり十のうち四に黄帝の名が記されているわけである。黄帝を神仙思想の代表者とみなし、書物の権威づけのために黄帝の名を冠したのである。これらの書はすべて亡佚しているために書物の内容は不明だが、書名から類推する限り、『黄帝雜子步引』は導引や歩虚などの歩行術、『黄帝岐伯按摩』は按摩、『黄帝雜子芝菌』は芝草やキノコなどの仙薬に関する書物であったように思われ

る。黄帝は広範囲に神仙思想とかかわっているが、『史記』や『列仙傳』の黄帝に関する記述には、それらの書物の内容を推測させるものはない。

『莊子』大宗師の黄帝には上帝的な性格があり、『史記』の黄帝の伝記の内容も大きくとらえれば、黄帝が天へと帰っていく話であり、黄帝の上帝的性格が反映したものと考えられる。しかしながら、この話を武帝に説いた公孫卿の眼目は、人間の皇帝である武帝が、黄帝と同様に昇仙できるのだというところにある。この場合、黄帝が最初から神であつては、むしろ不都合である。そのため、公孫卿はいったん黄帝を人として扱い、人である黄帝が昇仙して仙人となることができたとしているのであろう。『列仙傳』の場合もそれをふまえ、人であつた黄帝が仙人となつて昇天するという話になつている。『史記』の場合は武帝の昇仙願望をめぐつて生み出されたような話であつたが、『列仙傳』黄帝では武帝の話は一切、出されていない。『列仙傳』卷上、稷丘君の話の中では武帝が登場するが、そこでは武帝は昇仙できないものとして批判されているのである。

『列仙傳』黄帝の話では、黄帝は仙人の一人とされているのだが、黄帝のもつ本来の性格から考えればやや卑小化されている様にも思われる。

關令尹

關令尹は尹喜、關尹等と呼ばれ、『史記』の老子列傳にその名がみえる。ふつう、老子を引きとめて『道德經』五千言を書き残させた人物として知られている。

『列仙傳』卷上、十、關令尹には次のように記されている。

關令の尹喜なる者は、周の大夫なり。内學を善くし、常に精華を服し、徳を隠して行いを修むるも、時人知るものなし。老子西のかたに遊び、喜先ず其の氣を見て、真人有りて當に過ぐべきを知る。物色して之れを遮り、果たして老子を得。老子も亦た其の奇なるを知り、爲に書を著わして之れに授く。後ち老子と俱に流沙に遊び、胡を化す。苴勝の實を服し、其の終わる所を知る莫し。尹喜も亦た自ら書九篇を著わし、號して關令子と曰う(12)。

この文章を『史記』老子列傳の当該部分と比べてみる。

老子道德を脩め、其の學は自ら隠れ名無きを以て務めと爲す。周に居ること久しくして、周の衰うるを見、迺ち遂に去りて關

に至る。關令尹喜曰く、「子將に隠れんとす。彊いて我が爲に書を著わせ」と。是に於いて老子酒ち書上下篇を著し、道德の意、五千餘言を言いて去り、其の終わる所を知る莫し(13)。

『列仙傳』の「爲著書授之」の部分と老子列傳の「彊爲我著書」の部分と一致するのみで、あとはほとんど重複しない。ただし、全体の印象としては『史記』にみえる話と大きくかわるものではない。

關尹の名は、『莊子』外篇の達生篇と雜篇の天下篇、それに『呂氏春秋』不二篇にみえる。

達生篇の話では「子列子、關尹に問いて曰く」から始まる。「子列子」と、列子に敬称の「子」が冠せられているため、列子の弟子が列子を呼ぶという形になっている(14)。ここでは列子が關尹にたずねているという体裁であり、關尹は列子の師とも言ふべき扱いである。

その内容は、

子列子、關尹に問いて曰く、「至人は潜行して窺がらず、火を踏みて熱しとせず、萬物の上を行くも慄えず。請い問う、何を以て此に至れるか」と。關尹曰く、「是れ純氣を之れ守ればなり。知巧果敢の列に非ず。居れ、予れ女に語げん。凡そ貌象聲色の

有る者は、皆な物なり。物と物は何を以てか相い遠しとせんや。夫れ奚ぞ以て先に至るに足らんや。…」と(15)。

といったものである。

關尹の言葉はおおよそこういう調子でさらに続く。ここでは關尹の述べた内容と『列仙傳』の關令尹の話が全く無関係であることに注意すべきであろう。また、ここには老子は登場せず、關尹が關の長官云々といった話も見えない。

『莊子』雜篇、天下篇にみえる關尹は、

本を以て精と爲し、物を以て粗と爲す。…關尹と老聃は其の風を聞きて之れを悦び、之れを建つるに常無有を以てし、之れを主とするに太一を以てす。濡弱謙下を以て表と爲し、空虚にして萬物を毀たざるを以て實と爲す。

關尹曰く、「己に在りて居ること無ければ、形物自ら著る。其の動くこと水の若く、其の靜かなること鏡の若く、其の應ずること響きの若し。笏乎として亡きが若く、寂乎として清めるが若し。焉に同じくする者は和し、焉を得んとする者は失う」と。未だ嘗て人に先んぜずして、常に人に隨う。

老聃曰く、「其の雄を知り、其の雌を守れば、天下の谿と爲

る。其の白を知り、其の辱を守れば、天下の谷と爲る」と。人皆な先を取り、己れは獨り後を取るなり。曰く、「天下の垢を受く」と。人皆な實を取り、己れは獨り虚を取るなり。藏する無きなり。故に餘り有り。歸然として餘り有り。…關尹・老聃や、古の博大真人なるかな(16)。

とみえる。

ここでは關尹と老聃は併称されている。關尹も独立した思想家とみなされており、「静」や「清」について説いたようである。その意味で思想的に「清静無爲(17)」を説く老子と似る部分があったのだろう。しかしながら、關尹と老聃の關係については一言も言及されず、關尹が老聃の弟子だといった話も記されていない。

また『呂氏春秋』審分覽、不二篇に、

…老耽(18)柔を貴び、孔子仁を貴び、墨翟廉を貴び、關尹清を貴び、子列子虚を貴び、陳駢齊を貴び、陽生己を貴び、孫臏勢を貴び、王寥先を貴び、兒良後を貴ぶ(19)。

とみえる。

「關尹清を貴び」と「清」を貴ぶことは、天下篇の「寂乎として清めるが若し」と共通する。また「子列子」という呼び方も達生篇の「子列子」と同じである。要するに少なくとも『呂氏春秋』の頃には、關尹という思想家とその思想は、比較的知られていたということになる。『漢書』藝文志には『關尹子』九篇とあり、その書はすでに亡佚しているが(20)、その内容に右の記述と重なる部分があったのではないかと思われる。

以上、考察したように、『莊子』と『呂氏春秋』の記述には関連があるが、それらと『史記』の老子傳や『列仙傳』の記述は直接、結びつかない。『莊子』や『呂氏春秋』を見る限りでは、「關尹」はおそらく姓が「關」、名が「尹」という姓名であって、關所の長官という意味ではない。それでは關尹が關所の長官で、老子に請い、『道徳經』を書かせたという話はどこから出てくるのであろう。

『國語』周語中に、

敵國の賓至らば、關尹以て告ぐ(21)。

とみえる。

これは『周禮』地官にみえる「司關」のことであろう。ここでは

「關尹」は名ではなく、官職の名である。

『史記』や『列仙傳』では關令尹喜と長くなっている。ここでは「關令」が關所の長官という職名で、「尹喜」が姓名ということである。とくに「喜」という名については「莊子」や『呂氏春秋』にはみえなかったもので、注意を要する。『莊子』や『呂氏春秋』では「尹」を名とみたが、『史記』や『列仙傳』では「尹」は姓とされている。事実、「尹」という姓は珍しくない。

しかしながら、『國語』にみえる「關尹」の場合は「尹」は長官の意味である。「關尹」と「關令」は実質上、同じ意味となる。また直接、関わりがないかも知れないが、楚の国の宰相を「令尹」と呼ぶことはよく知られている。

詳細は不明だが、『莊子』や『呂氏春秋』にみえる人名の關尹と職名の關尹が混同され、思想的にも似た部分があるため、老子を師、關尹を弟子とみなし、『史記』のような伝説が作られるようになったのではないだろうか。人名と職名が混同されたため、新たに關令を職名、尹喜を人名としたのではないだろうか。「關尹」が「關」と「尹」の二つに分かれたような格好である。

『漢書』藝文志には『關尹子』九篇とあり、原注に、

名は喜、關の吏爲り。老子、關を過ぎ、喜、吏を去りて之れに

従う(22)。

とみえる。

ここでは、「尹」が何なのかは明確にされていない。

『漢書補注』によれば、

關尹は關正なり。名は喜(23)。

とする。

さらに『關尹子』の序文(劉向撰)には、

關尹子、名は喜、關尹子と號す。或いは曰く、關令子(24)。

とみえる(25)。『列仙傳』の本文もまた「關令子」である。「關尹子」と「關令子」とは混同されている。

また「喜」は名だとされているが、「喜」にも姓としての用例があり、またたんに「喜ぶ」の意味にもとれる。

以下、簡単にまとめてみる。

書名	職名	姓	名	備考
『國語』周語	關尹	關?	尹?	人名としては使われていない。
『莊子』達生篇	なし	關?	尹?	姓と名とは断言できないが、関所の長官という話はまだみえない。
『莊子』天下篇	なし	關?	尹?	同 右
『呂氏春秋』下篇	なし	關?	尹?	同 右
『史記』老子列傳	關令	尹	喜	
『列仙傳』	關令	尹	喜	號は關令子
『漢書』藝文志			喜	書名が『關尹子』
『漢書』藝文志原注			喜	
『漢書補注』	關尹		喜	關尹は關正
『關尹子』序文			喜	號は關尹子、或いは關令子
(劉向撰)				

右記にもとづいて『史記』の「關令尹喜曰」の読み方に関して考察してみれば、

- ① 關令の尹喜曰く、(「關令」が職名、「尹喜」が姓名)
- ② 關の令尹、喜曰く、(「令尹」が職名、「喜」は名)
- ③ 關の令尹、喜びて曰く、(「令尹」が職名、「喜」は動詞)

等の読み方が可能である。

ただし②と③は「令尹」を関の長官とするには不適當であるため、このままでは成立しない。「令」あるいは「尹」が衍字であるのかも知れない。令尹の一字を衍字として③ととるのが、文意から見て適當なようにも思えるが、推測の域を出ない。関の長官の姓が、長官を意味する「尹」であるというのは、あまりにも出来過ぎた話である。ただし、本来、事実に基づかないものであるとするならば、それでよいのかも知れない。

さて『史記』では、尹喜は老子に『道德經』五千言を書くことを慫慂しただけの存在として語られているが、『列仙傳』では、尹喜が本来、仙人に近い人物であったという話の組み立てとなっている。

・「内学」を善くしたとあるが、内学は外学に対する語で図讖の学をいう(26)。「晉書」葛洪傳には、

洪、南海太守鮑玄に師事し、玄も亦た内學し、あろか逆じめ將來を占う(27)。

とみえる。

つまり内学とは予知の類であり、尹喜は、老子が関を通過することを予め知っていたという筋立てとなっている。

「徳を隠して行いを修むるも、時人知るものなし」は、尹喜がそれほど優れた人物であったにもかかわらず、当時、無名であったことを合理的に説明するためのものであろう。

その後、老子に書物を著させたという『史記』にもとづく話がしるされる。『史記』では尹喜の役割りはこれだけであった。ところが、『列仙傳』に伝を起てる場合、それだけでは不十分だとみなしたのである。尹喜は老子とともに流沙に遊んだという話になっている。さらに苜勝（巨勝）の実、つまり胡麻の実を服用したとされている。

胡麻は張騫の西域探索でもちかえつたものとされており（²⁸）、『周易參同契』では、「巨勝すら猶お年を延ばす（²⁹）」と延年薬とされている。ここでは尹喜が西域に出生したということと絡めた話となっている。『列仙傳』は、とくに薬物との関連が強い書物であるが、文脈から考えれば薬物と結びつけることは強引にすぎるように思われる。

最後に「尹喜も亦た自ら書九篇を著わし、號して關令子と曰う」と書物を著したことになる。これは『漢書』藝文志に、『關尹子』とあるのに対応しているが、先に見たように「尹」ではなく、「令」である。

以上、考察したように關令尹喜の話は、老子との関わりが核となつてそれが成長していった話である。『史記』以前にも『呂氏春秋』

や『莊子』に關尹の話がみえるが、『列仙傳』は、それらとは全く無関係である。『史記』の話は本来、「關の令（尹）、喜びて曰く」であったかも知れず、もしそうだとすれば「尹喜」という名は誤読、あるいは錯簡から生じたものであるかも知れない。いずれにせよ『史記』の記述によつて、關尹は關所の長官の尹喜ということとなった。その『史記』のわずかな記述をもとにして、『列仙傳』は仙人の伝記を構成して關令尹喜を仙人の列に列しているようである。

涓子

『列仙傳』では卷上、十一に記される。九が老子で、十が關令尹であり、ここもまたわずかであるが老子と関連する。

涓子なる者は、齊人なり。好んで朮を餌し、其の精を接食す。三百年に至り、乃ち齊に見われ、天人經四十八篇を著わす。後ち、荷澤に釣りて、鯉魚を得たり。腹中に符有り。若山に隠れ、能く風雨を致す。伯陽九仙法を受く。淮南王安、少しく其の文を得るも、其の旨を解すること能わず。其の琴心三篇は、條理有り（³⁰）。ここにみえる「伯陽九仙法」の「伯陽」は老子の字とされている。

『史記評林』の老子列傳には、

老子なる者は、…姓は李氏、名耳、字伯陽、諡曰聃(30)。

と、伯陽が老子の字とされている。

この「涓子」は、『漢書』藝文志の道家にみえる『蜎子』十三篇の作者と同一人物ではないだろうか。原注には、「名は涓、楚人、老子の弟子(31)」とあり、顔師古の注によれば、「蜎子は姓なり」とされている。

『史記』孟子荀卿列傳には、「慎到は趙人、田駢・接子は齊人。環淵は楚人。皆な黄老道德の術を學び、因りて發明し、其の指意を序す。故に慎到、十二論を著わし、環淵、上下篇を著す(32)」とみえる。この「環淵」につけられた『考證』は、前掲の『藝文志』を引いた上で、「蜎環、音近し」とする。

これらによれば「涓子」は「環淵」のことである。

また『文選』の枚乘の「七發」にみえる「莊周・魏牟・楊朱・墨休・便娟・詹何の倫」のうちの「便娟」も関係するらしい。『文選』の注釈を参考にすれば、『淮南子』原道訓の「蜎蜎」、宋玉の釣賦にみえる「玄淵」がそれぞれ関連する。

『淮南子』にはこうみえる。

夫れ江に臨みて釣るに、曠日にして羅を盈たす能わず。鈎箴芒

距、微綸芳餌有り、加之詹何・娟嬖しかのみならずの數を以てすと雖も、猶お網罟と得るを争うこと能わず(33)。

ここでは女偏の「娟嬖」となっているが、『文選』同様に「詹何」とともにあらわされ、釣りの名人といったニュアンスで語られている。高誘の注釈でも、

詹何・娟嬖は、古の釣りを善くする人の名、數は術なり(35)。

とある。ここでは釣りは術である。

宋玉の釣賦には次のようにみえる。

宋玉と登徒子と偕に釣りを玄淵、に受く。止まりて並びに楚の襄王に見ゆ。登徒子曰く、「夫れ玄淵は、天下の釣りを善くする者なり」…(36)。

とみえる。

「こどもまた釣りの名人としてあらわされている。『文選』では「玄淵」であるが、ここでは「玄洲」である。「淵」であれば「環淵」に近い。

以下、簡単に表にしてみよう。

書名	名称	国	備考
『史記』 孟荀荀卿列傳 宋玉、鈞賦（『古文苑』）	環淵 玄洲	楚人	老子と関連。 鈞、弟子の宋玉・登徒子が楚の襄王とあう。
枚乘、七發（『文選』）	便娟		莊周・魏牟・楊朱・墨翟・詹何とともに。
『淮南子』 原道訓	娟娟		鈞。
『淮南子』 原道訓、高誘注	娟娟		鈞、術書名。
『漢書』 藝文志	娟子	楚人	老子の弟子。
『漢書』 藝文志原注	娟子	齊人	『天人經』・『琴心』を著す。
『列仙傳』			鈞りと関連。
『文選』 注所引、高誘	娟娟		老子と関連。
『文選』 注所引、宋玉	玄淵		白公の時の人。

『列仙傳』では齊人とあり、楚人とは異なるが、老子と関連づけられている。『史記』によれば「環淵」であり、黄老思想の系譜につながる思想家といえる。黄老思想は黄帝と老子の思想とされており（37）、やはり、老子と関連する。また「荷澤に釣りて、鯉魚を得たり。腹中に符有り」というのは、釣りと関連する。環淵

や玄淵の「淵」は水と関連し、玄洲の「洲」もまた水と関連するが、そのことと釣りが関係するかどうかは不明である。『列仙傳』ではたんに釣りをしたというだけでなく、釣り上げた魚の腹中から、「符」が出てきたという話となっている。これはやはり釣りと関連する呂尚の話や卷下の陵陽子明の話と共通する。

「好んで朮を餌し、其の精を接食す」というのは、「朮」という薬物と涓子の関係を説いているが、關尹や呂尚の場合と同様に、話の展開の上で薬を服用しなければならないという必然性はない。「能く風雨を致す」の「風雨」は、卷上、一、赤松子や四、赤將子輿に「風雨に隨いて上下す」、卷上、一四、師門に「風雨之れを迎う」等と見える表現で、仙人の話にはよくあらわれるものといえる。

涓子はそれほど著名な人物ではないが、老子の流れをくむ思想家であり、釣りの話にもかわる。環淵・玄洲・便娟・娟娟・娟子・娟淵・娟蠟・玄淵などは、おそらくすべて涓子と関わる名であろう。

『列仙傳』ではそれらを巧みに組みあわせた上で仙人らしい話を付加して仙人の列に加えているが、『天人經』四十八篇『伯陽九仙法』、『琴心』三篇などの書物の作者ともされている。

小 結

拙稿では『列仙傳』の卷上のうち、黄帝、關尹、涓子を取り上げ

た。今後、『列仙傳』の他の仙人に対しても考究し、さらに全体にわたる考察を行うつもりである。今回はとりあげた仙人について簡単にまとめ、小結としたい。

黄帝は古代の伝説上の天子として著名である。『莊子』の中では上帝的な性格がみえ、そこでは「天に登る」と記されている。おそらくそれを受けて『史記』でも天に登る黄帝の姿が武帝の昇仙願望に迎合する形で描かれている。『列仙傳』でもそれを踏襲する形をとるが、武帝との関わりの話は外され、黄帝の伝としてまとめられている。

關尹は老子との関わりで注目される人物であるが、本来、思想家として『莊子』や『呂氏春秋』に名が見えた。ただし、その内容は『列仙傳』に直接、反映しているわけではない。『列仙傳』のもっとくところは、『史記』のようだが、それだけでは内容が簡単にすぎると、芑勝を服用した話などをつけ加えているようにみえる。仙薬の話を付加するのは、『列仙傳』の他の話にも多くみえる。

涓子の名はさまざまな書物にみえるものの詳細な伝は不明である。『天人經』四十八篇、『伯陽九仙法』、『琴心』三篇など書物に関わる話が多い。知識人とされていたのであろう。なおここでは「好んで朮を餌し、其の精を接食す」と薬物の話が付加されている。

注

- (1) 『列仙傳』は前漢の劉向撰とされているが、その内容から考えて後漢頃に作られたものと考えられている。沢田瑞穂『列仙傳』(平凡社、中国古典文学大系8、一九六九年)参照。
- (2) 朋友書店、一九八九年。
- (3) 平凡社、中国古典文学大系8、一九六九年。
- (4) 集英社、全釈漢文大系33、一九七五年。
- (5) 小川環樹・本田濟監修、角川書店、一九八八年)一四五〜四五頁、四一〇〜四三〇頁(参考文献・索引)『列仙伝』部分を平木康平と共同執筆、『抱朴子』部分は尾崎正治の執筆。
- (6) 『中国神話の文化人類学的研究』(平河出版社、一九九〇年)。
- (7) 『古史弁』第七冊上編、開明書店、一九四二年。
- (8) 岩波書店、一九三九年。
- (9) 夫道有情有信、無為無形、可傳而不可受、可得而不可見、自本自根、未有天地、自古以固存、神鬼神帝、生天生地、在太極之先而不為高、在六極之下而不為深、先天地生而不為久、長于上古而不為老。豨韋氏得之、以挈天地、伏羲氏得之、以襲氣母、維斗得之、終古不忒、日月得之、終古不息、勘壞得之、以襲昆侖、馮夷得之、以游大川、肩吾得之、以處大山、黃帝得之、以

登云天、顯頊得之、以處玄宮、禺強得之、立乎北極、西王母得之、坐乎少廣、莫知其始、莫知其終、彭祖得之、上及有虞、下及五伯、傳說得之、以相武丁、奄有天下、乘東維、騎箕尾而比于列星。

(10) 黄帝已僊上天、羣臣葬其衣冠。『史記』卷二十八、封禪書

第六)

(11) 『十問』など房中術の書については別に考察する。

(12) 關令尹喜者、周大夫也。善内學、常服精華。隱德修行、時人莫知。老子西遊、喜先見其氣、知有真人當過。物色而遮之、果得老子。老子亦知其奇、爲著書授之。後與老子俱遊流沙、化胡。服旨勝實、莫知其所終。尹喜亦自著書九篇、號曰關令子。

『列仙傳』卷上、關令尹)

(13) 老子脩道德、其學以自隱無名爲務。居周久之、見周之衰、迺去至關。關令尹喜曰、子將隱矣。彊爲我著書。於是老子適著書上下篇、言道德之意、五千餘言而去、莫知其所終。『史記』卷六十三、老子韓非列傳第三)

(14) この形式は子墨子として『墨子』に多出する。

(15) 子列子問關尹曰、至人潛行不窒、蹈火不熱、行乎萬物之上而不慄。請問、何以至於此。關尹曰、是純氣之守也。非知巧果敢之列。居。子語女。凡有貌象聲色者、皆物也。物與物何以相遠。

夫奚以足至乎先。……『莊子』外篇、達生第十九)

(16) 以本爲精、以物爲粗。……關尹老聃聞其風悅之、建之以常無有、主之以太一。以濡弱謙下爲表、以空虛不毀萬物爲實。關尹曰、在己无居、形物自著。其動若水、其靜若鏡、其應若響。笏乎若亡、寂乎若清。同焉者和、得焉者失。未嘗先人、而常隨人。老聃曰、知其雄、守其雌、爲天下之谿。知其白、守其辱、爲天下谷。人皆取先、己獨取後。曰、受天下之垢。人皆取實、己獨取虛。无藏也故有餘、歸然有餘。……關尹老聃乎、古之博大真人哉。『莊子』雜篇、天下篇第三十三)

(17) 『老子』四十五章に「清靜爲天下正」、『史記』老子傳に「無爲自化、清靜自正」。

(18) 老聃ではなく、老聃となっている。

(19) ……老聃貴柔、孔子貴仁、墨翟貴廉、關尹貴清、子列子貴虛、陳駢貴齊、陽生貴己、孫臏貴勢、王寥貴先、兒良貴後。『呂氏春秋』卷十七、審分覽、七曰二)

(20) 現今のもの『子彙』所収、『關尹子』は依託とされる。注(25) 参照。

(21) 敵國賓至、關尹以告。『國語』周語中)

(22) 名喜、爲關史。老子過關、喜去吏而從之。『漢書』卷三十、藝文志第十)

- (23) この前後も含めて原文を引いておく。錢大昭曰、高誘注呂覽云、關尹關正也。名喜。『漢書補注』漢書三十、藝文志第十(24) 關尹子、名喜、號關尹子。或曰、關令子。『子彙』所收、『關尹子』劉向序
- (25) 現今のものは、『四庫提要』に「唐五代間方士解文章者・爲也」と依託とされている。
- (26) 『後漢書』方術傳の序の注に「内學謂圖讖書也」とある。
- (27) 洪師事南海太守鮑玄、玄亦内學、逆占將來。『晉書』葛洪傳
- (28) 胡麻、釋名、巨勝：漢使張騫始自大宛得油麻種來、故名胡麻。『本草綱目』胡麻
- (29) 巨勝尚延年。『周易參同契』
- (30) 涓子者、齊人也。好餌朮、接食其精。至三百年、乃見於齊、著天人經四十八篇。後釣於荷澤、得鯉魚、腹中有符。隱於岩山、能致風雨、受伯陽九仙法。淮南王安少得其文、不能解其旨也。其琴心三篇、有條理焉。『列仙傳』卷上、涓子
- (31) 老子者、…姓李氏、名耳、字伯陽、諡曰聃。『史記評林』卷之六十三、老莊申韓列傳第三。『史記會注考證』は当該箇所を「老子者、…名耳、字後、姓李氏」とし、「字伯陽」が消され、「諡曰聃」が「字聃」に書き換えられている。『考證』は『後漢書』桓帝紀に付された章懷注所引の『史記』により改めたとする。

- (32) 名淵、楚人、老子弟子。『漢書』卷三十、藝文志第十。
- (33) 慎到趙人、田駢接子齊人。環淵楚人。皆學黃老道德之術、因發明、序其指意。故慎到著十二論、環淵著上下篇。『史記』卷七十四、孟子荀卿列傳第十四)
- (34) 夫臨江而釣、曠日而不能盈羅、雖有鈎箴芒距、微綸芳餌、加以詹何媼媼之數、猶不能與網罟爭得也。『淮南子』卷一、原道訓
- (35) 詹何・媼媼、古善釣人名、數術也。『淮南子』卷一、原道訓、注
- (36) 宋玉與登徒子偕受釣於玄洲。止而竝見於楚襄王。登徒子曰、夫玄洲、天下之善釣者也。『全上七代文』卷十、宋玉所引『古文苑』釣賦
- (37) 黃老思想に関しては淺野裕一『黃老道の成立と展開』(創文社、一九九二年)、拙稿「漢初の黄老思想」、『待兼山論叢』第一三号、一九七二年)を参照。
- ※本稿は平成15年度科学研究費補助金(基盤研究)(C)(2)神
- 仙思想の成立に関する研究にもとづく研究成果である。